



桜図書館のサイン

内山 恵介

I. 桜図書館の概要

さいたま市で20番目の図書館として、桜図書館は2005年7月5日に開館しました。区役所、プラザウエスト（ホール、コミュニティ施設）との複合施設になっていて、隣には体育館もあります。

図書館は、4階建ての施設の1・2階部分にあります。延床面積は2,976㎡で、開架スペースは2,086㎡です。蔵書は、開館時で約11万冊の図書資料、約1万3千点のAV資料を用意しました。1階は1,613㎡で、一般書や郷土資料を配置し、社会人専用の部屋（27席）や個人のパソコンを持ち込んで利用できる部屋（18席）があります。2階は1,363㎡で、児童書・ヤング図書・雑誌・新聞・AV資料を配置し、イベントルーム、ヤング図書コーナーに隣接した調べ学習室（40席）、子どもに読み聞かせをするための親子読み聞かせ室を設けています。

II. 桜図書館のサイン

桜図書館のサインは、大きく5つの種類に分けられます。

1. 天吊り式…コーナーサイン、誘導サイン
2. スタンド式…利用案内、誘導サイン
3. 上置き式…サービスデスクの役割表示
4. 壁掛け式…階の案内表示、利用案内
5. 書架サイン…書架の資料表示

1～4のサインについては、専門の業者に委託して作成を進めると同時に、2のスタンド式

サインの一部と5の書架サインは、カッティングシートとテプラを用いて、職員が作成しました。

1. 天吊り式（図1）

主に、そのサインの示すエリアに置かれている資料や、他フロアへの誘導などに使用しています。天吊り式のサイン作成にあたっては、布を吊るバナー形式とし、書架のベースとなった色と色調を合わせた上で、目立つものを考えました。書架は、桜色（薄めのピンク）だったので、同じ系統の濃い色を背景に使用し、文字は白抜きにしました。また、カウンター上のサインは、落ち着きを持たせるため茶色をベースにした配色としています。



図1. 天吊り式サイン

2. スタンド式のサイン（図2）

スタンド式のサインは、出入りに置かれた利用案内を示したのものや、カウンターの説明、他フロアへの誘導などに使用しています。一部を除いて、自立可動式の無地のスタンドを購入し、職員がカッティングシートを使って、サイン全体の状況を見ながら、必要度の高いものか

ら作成していく方式をとりました（カッティングシートについては、5. 書架サインで詳述します）。



図2. スタンド式の案内サイン

3. 上置き式

主にカウンターの上に置き、どのようなサービスをするカウンターかを示すための表示をしています。登録・貸出・返却などがありますが、子どもも大人もわかるように、大きくひらがな（かりる・かえす）で表示をしました。色もシンプルに、白地に黒い文字を大きく表示しました。

4. 壁掛け式

このサインは、主に各フロアのガイドを行っています。エレベーターホールの横やエレベーターの中、階段の踊り場などで用いています。

5. 書架サイン

書架サインは、3種類に分けられます。5-1天板につけたサイン、5-2側板のサインと、5-3ブックエンドのサインです。

書架のサインについては、業者に委託するのではなく、最初から職員が作成することにしていました。そのため、それを前提とした書架を導入しました。開館してから資料が増えていくと、最初に用意した表示と、実際に書架に置かれている図書がずれてきます。職員自らが書架のサインを作成することで、そのような図書の

移動に柔軟に対応し、同時に表示のレベル（正確さと美しさ）を保つことができます。開館時に作られた表示の上にワープロで打ったものなどを重ねるのではなく、開館時に作られたのと同じ表示で作りを変えていける環境を目指しました。

5-1. 天板サイン（図3）

天板サインは、スチールの枠にプラスチック製の板をはめこむ形になっています。書架の納品の段階では、何も表示されていないプラスチックの板がセットされているだけでした。この板に、カッティングシートで作成した文字を張り付けてサインを作成します。



図3. 天板サイン

(1)カッティングシートとは？

粘着性のある塩化ビニールのシートを、文字や図形などに型抜きして張り付けて使います。平面なら、どこにでも張ることができます。また、屋外用のシートなら、雨や日光に対する耐久性もあります。ガラスに張ることも可能なので、商店のガラスドアなどでカッティングシートを使ったサインを見ることができます。印刷されたシールと違うのは、シートの色をそのまま生かす点です。桜図書館では、開館の準備にあたって、8色のシートを用意しました。

(2)カッティングシートによるサインの作成

カッティングシートを望んだ形にカットするための専用の機器（カッティングマシン）を用います（図4）。カッティングマシンは、カットできるサイズや機能により価格が変わっ

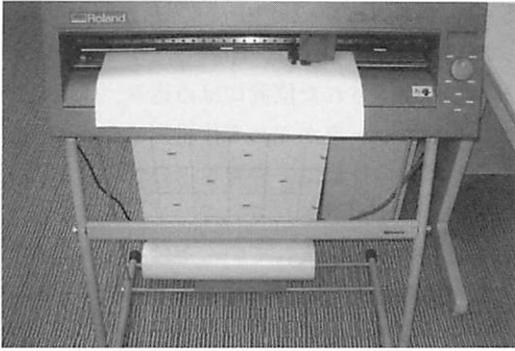


図4. カuttingマシン

てきますが、安いものでは数万円から、高いものでは100万円を超えるものまであります。桜図書館では、70cm幅までのロールタイプのシートが扱える機種を使用しています。

文字や図形の作成は、専用のソフトウェアを使用します。通常のワープロソフトでは、カuttingマシンで扱えるデータが作れないため、使えないようですが、個別に確認が必要でしょう。一般的なグラフィックソフト (Adobe® Illustrator® など) で対応しているものもあるようなので、調べてみてください。桜図書館では、専用のソフトウェアを使用しています。

作りたい文字や図形のデータを作成したら、カuttingマシンで、シートのカットを行います。カットが終了したら、転写するための透明の粘着シートをカット済みのカuttingシートに張り付けます。粘着シートに、カットした文字などが張り付きます (図5)。張りたい場所に粘着シートを当てて、位置が決まったら上からよく押さえます (図6)。押さえ終わって粘着シートを剥がすと、カットした文字・図形が張り付けられているという仕組みです (図7)。転写用のシートを使うことで、作成した文字や図形の位置関係を保ちながら張り付けることが可能です。

(3)カuttingシートの利点

なんとといっても、きれいに仕上がることです。また、屋外用のものがあるくらいですから、長持ちします。決して安いとは言えませんが、サ

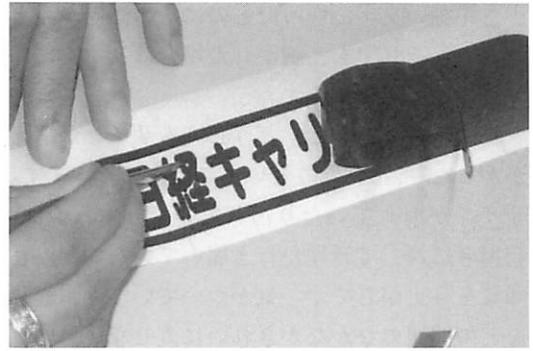


図5. 転写用の粘着シートに張ったカuttingシートの不要部分を剥がす作業



図6. カuttingシートを張る作業



図7. 粘着シートを剥がして完成

インの変更があるたびに業者に発注することを考えると、手間・コストは有利になるのではないのでしょうか。なにより、必要に応じて即時対応が可能であることの利点は見逃せません。

ただし、使う場所によっては、剥がれやすくなることもあります。桜図書館の場合では、雑誌架の面出し部分で、雑誌の出し入れのときにこすれて剥がれてきた箇所があります。特に、

小さく細い文字で作ったものにその傾向が見られます。それでも、剥がれた場合は、すぐに作り直すことができます。

長い年月がたつと、どうしてもサインが消えかかったり、汚れたりということがでできます。サインが消えていたり汚れていたりするのは、利用者に対して管理が行き届いていないという印象を与えがちです。気がついていても、経費などの問題でなかなかきれいに直せないというケースもあるのではないのでしょうか。その場合に、カッティングシートを使ったサインを作成できる環境が用意できれば、かなりのところまで対応が可能になります。ただし、ここで言う環境の中には、サインを張るための表示板の整備まで含まないと、きれいなサインにはならないこともあるので、それなりの経費をかけることが必要になるかもしれません（図8、9）。



図8. カッティングシートで作成した風船
(この写真のみ東浦和図書館)



図9. カッティングシートで作成した書架の案内

5-2. 側板サイン (図10)

書架の側板の表示は、印刷したサインを、あらかじめ用意された位置にはめ込み、透明のアクリル製カバーをかぶせる仕組みになっています。サインの作成は、書架専用のサイン作成ソフトウェアが用意されていて、フォームに配置する資料の内容を入れていくだけで、側板のサインが作れるようになっています。蔵書が増え

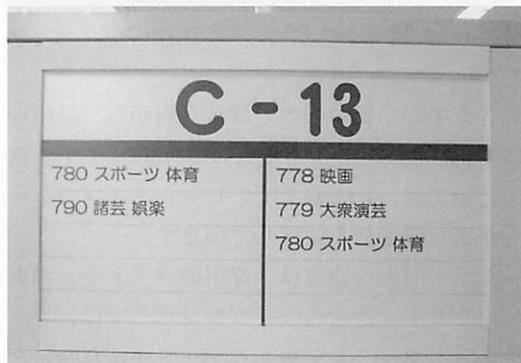


図10. 側板サイン

ていくと、細かな配架位置の移動が起こりますが、それに対しても、ワープロを打つと同じ感覚でデータを修正し印刷して差し替えるだけで、サインの修正が済みます。

5-3. ブックエンドのサイン

ブックエンド (図11) については、書架を発注するときに、書架と同色のスチール製のブックエンドを同時に発注しました。このブックエンドには、底の部分に磁石を張り付けています。桜図書館の書架は、一部を除いてスチール製の書架を採用しているため、底に貼り付けた磁石とスチールの書架が磁力で密着し横すべりせず安定して自立できるブックエンドを考えました。

ブックエンドを書架に並んだ本の間に置いたときに、本の背より手前に突き出すようになる部分に (図12)、書架にどのような資料が配置されているか、わかるように表示しています。この表示については、カッティングシートではなくテプラを使用しました。カッティングシ

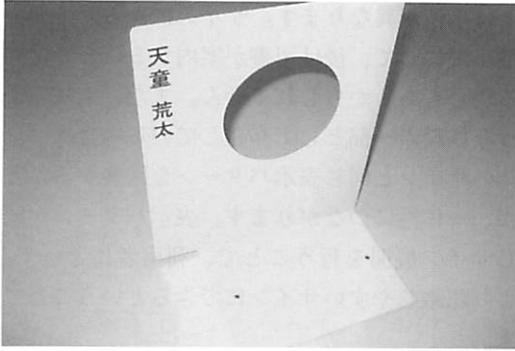


図11. ブックエンド



図12. ブックエンドを書架に設置した状態

トを使うには、文字が小さすぎて扱いにくいと思います。また、本の出し入れでこすれて剥がれやすくなることも懸念されました。書架と同色のブックエンドに、透明のテプラによる文字を張り付けています。書架と同色のため、やや目立ちにくいようですが、書架との一体感はすぐれているため、慣れた利用者にとって、うるさく感じさせることはなさそうです。

Ⅲ. サインの考え方

桜図書館は、1階と2階に分かれています。

初めて来館した場合、1階の入り口から入って、1階しかないと思ってしまう利用者もいます。天吊りのサインで、「1階＝一般書、2階＝こどもの本」という表示(図1)をしまし

たが、実際は効果があるとは感じられませんでしたが、中には、1階のフロアを回って見た後に、2階にある新聞雑誌、AV資料の有無・場所を聞いてくる利用者がいました。

これは、2階への誘導サインが、わかりにくい、または不足していたことが原因と思われます。そこで、入ってすぐ目に付くところに、カッティングシートで作成したスタンド式のサイン(図2)を置いて、2階に置いている資料を案内したところ、それを目に留めて2階に向かう利用者が見られるようになりました。しかし、そのサインの脇を通ったにもかかわらず、2階に置かれている資料はどこにあるのかを聞いてくる利用者もいます。

周りを注意深く見て、こちらの用意したサインを使って、自分で望む場所へ行くことのできる方から、サインはあるものの十分に目に入らない方まで、いろいろな利用者がいます。サインだけで、全ての利用者が事足りるということは難しいので、職員のガイドと合わせて、いかに効果的に利用者を目的の場所へ誘導できるかという考え方が必要ではないでしょうか。

サインをひたすら目立つものにするとう効果は大きくなるかもしれませんが、一方で、館内の雰囲気を落ち着かないものにする可能性も出てきます。館内の内装・家具との統一感を損なわない範囲で、どうやって目立つものにするのでしょうか。

例えば、黄色と黒の組み合わせは目立ちますが、あまりにも家具や内装とかけ離れたものであるなら、サインとしては成功しても館内の雰囲気を落ち着いたものにはできなくなるでしょう。繰り返し来館する利用者が多くいる図書館では、うるさく感じられる方も出てくるのではないのでしょうか。

どんなにわかりやすくサインを表示したつもりでも、やはり、それで足りない利用者は必ず出てくると考えて、利用者のうちかなりの程度まで誘導できれば成功と考える割り切りも、必要と思われます。

サインの構成上の留意点として、「シリーズ図書館の建築 2 家具とサイン」¹⁾の中で、西川潔氏は、①サインの設置個数は少なくする、②サインの情報はできるだけ少なくする、③空間表示型サインを充実するという3点を挙げています。空間表示型サインについては、利用者はあまりサインを見ない、進路選択に行き詰ってからサインを見ることが多いので、どこからでも容易に戻れる空間表示型を重視したサインシステムが望ましいとしています。特に、小規模の図書館では、動線の案内を行うサインではなく、エリアごとに何が配置されているかというサインで十分に役立つケースが多いでしょう。

Ⅳ. 専門図書館のサイン

「図書館のサイン計画」²⁾の中では、専門図書館について、「サインの問題はそれぞれ個々の図書館次第である」、と記されています。「小規模な組織では、家庭で、わたしの名前はお母さんです、という記章をつける必要がないのと同様に、改まったサインシステムを備える必要はない」という記述も見られます。小さな図書館では、一般的なサイン計画の原則よりも、個々の事情に応じたサイン作りに徹した方がいいという考えです。

利用者が限られている専門図書館と、不特定多数を常に考慮しなければならない公共の施設

とは事情が異なります。サインによるガイドを最小限にして、後は司書が案内することで足りる場合もあるかもしれません。また、病院のような施設の一部として存在している場合は、全体のサインと同じ表示パターンを踏襲することが、一体性につながります。表示パターンが同じサイン展開を行うことで、利用者にとって、より認識しやすいサインにできるということです。

Ⅴ. おわりに

本稿は、桜図書館で、職員が行ったサインの作成を中心に説明してきました。

公共図書館の事例ですので、病院図書館の方にどの程度役立つかを考えると心もとないのですが、職員がどこまでサインを作れるかという点で、一つの示唆になれば幸いです。

参考文献

- 1) 西川潔. 図書館のサイン計画. 日本図書館協会施設委員会編. シリーズ図書館の建築 2 家具とサイン. 東京: 日本図書館協会; 1984. p.103.
- 2) ゲスト・ベリー. 専門図書館におけるサイン. ドロシー・ポレット, ピーター・C・ハスキル編. 図書館のサイン計画—理論と実際—. 東京: 木原正三堂; 1981. p.133-5.